

パンヨーロッパ運動と『ヴェルトビューネ』

竹 本 真 希 子

はじめに

1892年のドイツ平和協会 *Deutsche Friedensgesellschaft* の設立を機に本格的に始まったドイツの組織平和運動は、第一次世界大戦以前は、自由主義的な知識人に支えられたブルジョア改革運動の性格をもっていた。この運動は平和協会の設立に指導的役割を担ったノーベル平和賞受賞者である作家ズットナー *Bertha von Suttner* にみられる人道主義的な平和主義の影響を受け、同時にシュッキング *Walther Schücking*、ヴェーベルク *Hans Wehberg* ら国際法学者による国際法を理論の基盤としたアカデミックな運動でもあった。国際連盟や仲裁裁判所といった超国家的組織の設立をめざした。ハーグで行われた国際平和会議への参加など、いくつかの成果はみられたものの、第一次世界大戦の勃発を防げず、ドイツの平和運動は路線の見直しをせまられた。

第一次世界大戦後、ヴァイマル共和国期では、総力戦の悲惨な経験が多くのひとびとに戦争と平和の問題への関心呼び起こしたこともあり、労働者や若い世代の左翼の知識人層など、より広い範囲のひとびとが平和運動に参加した。彼らはドイツ平和協会やドイツ人権協会 *Deutsche Liga für Menschenrechte* といった組織や、これらの平和組織を束ねる上部団体として設立されたドイツ平和カルテル *Deutsches Friedenskartell* に加盟した。これにより、ドイツの平和運動は、それまでの運動で中心的役割を担っていた第一次世界大戦から運動に参加していた層、すなわちドイツ民主党 *Deutsche Demokratische Partei* を支持する傾向にあった自由主義者層である穏健派と、世界大戦後に平和運動に関わった層、すなわちドイツ社会民主党 *Sozialdemokratische Partei Deutschlands* 支持者による急進派の双方に担われることとなった。そして後には、急進派から革命的平和主義者が派生したのであった。

こうした平和組織を支える層の変化は、平和運動の特徴の変化をもたらした。

世界大戦以前の国際法的な議論に加え、新しく内政改革の要求が平和追求の方法として積極的に打ちだされた。このような異なる方向の議論の混在は、平和運動の方向性に統一さを失わせる結果となった。平和組織内の指導力は穏健派から急進派へ急速に移ったが、このことは穏健派の平和主義者を平和運動から離脱させることとなった。平和組織はしだいに分裂状態に陥って弱体化し、勃興しつつあったナチスに対抗することができなかつたのである¹。

ところで、急進派の加入によって内政改革の要求が多く出されたとはいえ、国家間の争いである戦争に関する最も根本的な問題、つまり外交問題に関して引きつづき活発な議論が行われたのは言うまでもない。ヴァイマル共和国の外交を決定づけたヴェルサイユ条約と第一次世界大戦の戦争責任問題を始めとして、賠償金問題、フランスやポーランドとの協調などが平和主義者の議題となった。とくに国際連盟に対する平和主義者の関心と要求は高かった。というのも、上述したように、国際連盟の設立はドイツ平和協会設立以来の組織平和主義者の目標であり、民族自決を主張するアメリカ合衆国大統領ウィルソン Thomas Woodrow Wilson による十四か条と彼のイニシアチブによる国際連盟は、ドイツの平和主義者の長い間の要求を満たすものであるかに思われたからである。しかし実際にできあがったものはいわゆる勝者の連盟であり、提唱国のアメリカが不参加、敗戦国のドイツは参加を許されず、ソ連も加盟できないという、世界を束ねる組織としては期待はずれのものであった。

こうした国際連盟の現状により、国際連盟の改革、改善の要求が平和主義者の大きな課題のひとつとなった。そして同時に、現状の国際連盟という体制を保持しながら理想の形に近づけようとするこの努力の一方で、国際連盟の非力さを補うものとして、まずはヨーロッパを統合するという形で平和を求めようという思考がますます現実味を帯びるものとなった。この際、統合されたヨーロッパ（多くは「ヨーロッパ合衆国」が想定された）が国際連盟の枠内にあるべきかどうか、それとも国際連盟の代替物としてあるべきかも議論された。

平和主義者たちはこうして国際連盟の問題、ヨーロッパの問題を、新聞、雑誌の場で議論したわけであるが、彼らの言論活動の代表的な舞台のひとつが週刊誌『ヴェルトビューネ Die Weltbühne（世界舞台）』²である。

『ヴェルトビューネ』は 1905 年に演劇評論誌『シャウビューネ Die Schaubühne（舞台）』として、演劇評論家ヤーコブゾーン Siegfried Jacobsohn

によって創刊された。当時の社会情勢を反映して、しだいに演劇評論以外の政治記事の頁を増やし、『舞台』という名が適当でなくなったことから、1918年に『ヴェルトビューネ』に改題し、ひろく政治、文化、経済を扱う雑誌となった。『ヴェルトビューネ』誌は、オシエツキーCarl von Ossietzky³の厳しい国防軍批判や、「ペーター・パンターPeter Panter」や「テオバルト・ティガーTheobald Tiger」など、いくつものペンネームを使い分けて書かれたトゥホルスキーKurt Tucholskyの政治風刺でよく知られるが、彼ら以外にも、クヴィツデLudwig QuiddeやゲルラハHellmut von Gerlach、フェルスターFriedrich Wilhelm Foerster、ヒラーKurt Hillerといった多くの平和主義者が同誌上で平和主義、反軍国主義の論文を発表している。『ヴェルトビューネ』は平和組織の機関誌ではなかったにもかかわらず、その誌上にあらわれた急進的な平和主義により当時から「平和主義者の巣窟」⁴と呼ばれていたのである。

ヴァイマル共和国期に出版された雑誌としては、『ヴェルトビューネ』誌は、ライバル誌であり寄稿者も読者層も分け合っていた『ターゲ・ブーフ Das Tage-Buch (日記)』⁵誌などに比べれば、比較的好く研究されていると言えよう。しかしこれまでの研究の多くは『ヴェルトビューネ』誌を概観したもの⁶以外は、同誌を文学研究の側から取りあげるか⁷、または同誌の内政問題への取り組みと、その結果として起こったいわゆる『ヴェルトビューネ』裁判を当時のジャーナリズムと司法の関係で論じている⁸。『ヴェルトビューネ』誌にはオシエツキーの巻頭記事をはじめとして、多くの紙面が外交問題に割かれていたが、これらは十分に扱われてこなかった。加えて、平和思想史の脈絡で『ヴェルトビューネ』が扱われることもほとんどなかった。

本稿はしたがって、これまで十分に検討されてこなかった『ヴェルトビューネ』誌の平和主義者の平和観を理解する試みとして、同誌に掲載された記事から、彼らの思想を当時の平和運動の脈絡で読んでいくという意図をもっている。とくに今回は、当時の平和主義者が積極的に論じた議題のひとつである「パンヨーロッパ運動 Paneuropa-Bewegung」に関する記事を取りあげ、この問題に関する平和主義者の反応をみていくことにする。

1. ヴァイマル共和国期のヨーロッパ統合運動

平和主義者の議論を検討する前に、1920年代のヨーロッパ統合論を概観してみたい。

ヨーロッパ統合の思想は、カント Immanuel Kant の永遠平和の思想にも見られるように、19世紀以前にも存在した⁹。しかしこの時期のヨーロッパ統合の思想はどちらかといえば理念的なものであり、現実に政治とむすびついてヨーロッパの統合が議論されるのは、帝国主義の時代をまたなければならなかった¹⁰。

1920年代のヨーロッパ統合運動のうち最も影響力をもったのは、リヒャルト・クデンホーヴェ・カレルギ伯 Richard N. Graf Coudenhove-Kalergi¹¹ によるパンヨーロッパ運動である。

提唱者であるクデンホーヴェは、日本人女性とオーストリア外交官の間に東京で生まれた人物で、1918年以降のハプスブルク帝国の解体以降はチェコスロヴァキア共和国の市民として暮らした。クデンホーヴェ家、カレルギ家の血筋がヨーロッパの多くの民族に由来することや、母親である青山光子を通して得た日本文化への理解など、彼の思想形成にいわばコスモポリタンになりうる環境がととのっていたことは日本でもよく知られている。クデンホーヴェはいくつもの著書を発表すると同時に、『ヴェルトビューネ』誌や『ターゲ・ブーフ』誌のような週刊誌にも寄稿するなどして、言論活動を行なっていた¹²。1923年に発表した著書『パンヨーロッパ Paneuropa』¹³でヨーロッパ統合運動を提唱したクデンホーヴェは、生涯にわたりこの運動に積極的に関わり、これにより現在では戦後のヨーロッパ統合運動の先駆者として高く評価されている。

クデンホーヴェのヨーロッパ構想を簡単に説明してみよう。

彼は世界をパンアメリカ、極東アジア、イギリス帝国、ロシア連邦、パンヨーロッパの五つに分けた。パンヨーロッパは「二十六の比較的大なる国家と、五の小領域より成る。かかる国家合成体の広さはおおよそ五百万平方キロメートル、その人口約三億に達する」¹⁴もので、これには各国の植民地も含まれる。この「ヨーロッパ」はいわゆる地理的に理解されるヨーロッパとは異なり、世界各地に散らばって領土を持つイギリスは独立したイギリス帝国とされ、パンヨーロッパには含まれない。

彼のプログラムでは、ヨーロッパの国家連合の設立が目ざされる。この国家

連合のもとでは、ヨーロッパのすべての国家が平等の権利をもち、安全と独立は保障される。国家間の闘争を調停するための唯一の機関としてヨーロッパ連邦裁判所が設立され、ヨーロッパ軍事同盟やヨーロッパ関税同盟がつくられるべきだとされた。ヨーロッパが有する植民地の共同開発や統一貨幣の導入、ヨーロッパ文化共同体の基盤となる国民文化の保護、および国民的、宗教的少数派の保護が主張された¹⁵。

クデンホーヴェがパンヨーロッパ運動を行なった背景には、当時の知識人に見られたヨーロッパの危機感があった。これは第一次世界大戦がヨーロッパを火種にはじまったことにみられるヨーロッパの政治への危機感であると同時に、アメリカや日本などの新興国に覇権が奪われつつあることへの危機感でもあった。そしてロシアのボルシェヴィズムへの強い不信感にもこの運動は触発されていた。ロシアの脅威からヨーロッパを守るものとしてのパンヨーロッパ連合の在り方は、クデンホーヴェの次のような言葉から明らかになる。

「最後にはロシア・ナポレオンがロシア革命に次ぐに至り、彼は東ヨーロッパの諸小国より彼のライン連邦を組織し、その援護下にヨーロッパに最後の一撃を与えるに至るであろう。ヨーロッパをこの運命より救うべく今は時は存する。この救済を称してパン・ヨーロッパという。すなわちポーランドよりポルトガルに至るすべての国家の国家連合への政治的経済的結合である」¹⁶。

「パン・ヨーロッパ問題はロシア問題において最高潮に達する。ヨーロッパ政策の主要目的はロシア来襲の防止でなければならぬ。これを防止するにはヨーロッパの団結という唯一の手段あるのみである。

歴史はヨーロッパに対し、いっさいの国家的敵愾心を去って、国家連合に結合するか、もしくはロシアの征服の犠牲となるかを選ばせている。第三の可能性はヨーロッパに対して存在しないのである」¹⁷。

「ヨーロッパに対するただ一つの賢明な政策は、ロシアに対し平和政策 — しかしいかなる不慮の事件に対しても確保せられた — を遂行するにある。これが確保はただ、すべてのヨーロッパ国家の、ヨーロッパ・ロシア

の国境に対する連帯的政策、ならびにロシアの脅威に対するパン・ヨーロッパ防衛同盟によってのみ可能である」¹⁸。

このクデンホーヴェのパンヨーロッパ論であるが、ドーズ案やロカルノ体制などが現実となるにつれて、ヨーロッパ各国の著名な政治家、知識人らのなかに賛同者を獲得するようになった。1926年には正式に「パンヨーロッパ連合 Paneuropa Union」を設立し、総裁にはクデンホーヴェ自身が就任した。彼の構想はオーストリアにおいてとくに支持されただけでなく、トーマス・マン Thomas Mann、オルテガ・イ・ガセット José Ortega y Gasset、リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss、ヴァレリー Paul Valéry などの著名人もこれに共鳴した¹⁹。

同じく 1926年にはドイツにパンヨーロッパ連合の支部がつくられた。社会民主党のパウル・レーベ Paul Loebe がドイツ支部の総裁に、民主党のコッホ・ウェーザー Erich Koch-Weser は副総裁に就任するなど比較的広い層がこの連合に加入した。

とくに諸国家間の関税障壁の撤廃という目標は、西欧の大コンツェルンから受け入れられた。パンヨーロッパ運動はイー・ゲー・ファルベン IG-Farben などに支持され²⁰、また大銀行家ヴァールブルク Max von Warburg からの資金援助をうけるなどした²¹。

さらに各国の著名な政治家たちもこの運動に関心をしめした。フランスのエリオ Edouard Herriot、イギリスのチャーチル Winston Churchill、アメリカのケログ Frank B. Kellogg からも賛意をしめした²²。そしてなによりブリアン Aristide Briand を賛同者として獲得したのは大きかった。

1926年10月3日には、ウィーンで初のパンヨーロッパ会議が開かれた。この会議はウィーンのコンサートハウスを「偉大なパンヨーロッパ人」であるカール大帝やカント、ナポレオン、ニーチェの肖像で飾るといふ大掛かりなものであったと言われる²³。1930年5月18日にベルリンで開催されたパンヨーロッパ会議では、ヴィルト Joseph Wirth やクデンホーヴェらと並んで、トーマス・マンが講演者として登場している²⁴。

ところで、クデンホーヴェのパンヨーロッパ運動以外にも、当時ヨーロッパ統合をめざす運動は各地に存在した。そのひとつが 1921年、ウィーンにつく

られた「文化協力のための同盟 Verband für kulturelle Zusammenarbeit (文化同盟 Kulturbund と略される)」である。ザイペル Ignaz Seipel らが所属したこの団体は、知的エリートをメンバーとするもので、フランスの知識人と提携し、のちに「ヨーロッパ文化同盟 Europäischer Kulturbund」へと発展した。クデンホーヴェのパンヨーロッパ連合とは反共的立場の点で近く、のちに提携した。

1925年には「ヨーロッパ関税協会 Europäischer Zollverein」が設立された。これは経済界の代表者たちが、ヨーロッパにおいて関税の壁や経済上の障壁をなくそうという目標のもと設立した組織であった²⁵。

次いで1926年には「ヨーロッパ協調のための同盟 Verband für europäische Verständigung」がジュネーヴにつくられた。そのドイツ委員会はノッシヒ Alfred Nossig によって率いられた。シュッキングやハイレ Wilhelm Heile²⁶らが所属したこの団体は、反ソヴィエトの立場でパンヨーロッパと共通するものの、実際には競争関係にあった。1928年にパンヨーロッパ連合、ヨーロッパ関税協会、ヨーロッパ協調のための同盟、ヨーロッパ文化同盟は「ヨーロッパ協調のためのドイツカルテル Deutsches Kartell für europäische Annäherung」をつくり、それぞれの代表を参加させたが²⁷、パンヨーロッパ連合とこの同盟の争いは続き、これらの四つの団体がまとまって活動することはなかった²⁸。

クデンホーヴェのパンヨーロッパ運動自体は1920年代がその最盛期であった。彼の運動を受け継いだのはブリアンである。ブリアンはパンヨーロッパ連合の名誉総裁を務めており、ロカルノ条約や不戦条約といった協調外交の成功をうけて、首相であった1929年、本格的に国際連盟にたいしてヨーロッパ合衆国構想を提案した。その年の9月に出されたブリアンの提案はヨーロッパ合衆国の経済的側面を強調したもので、シュトレゼマン Gustav Stresemann らが賛意を示したが、フランス政府による具体的な覚え書として1930年5月に発表されたときには、この合衆国構想はフランスのための安全保障と合衆国の政治的意味が前面に押し出されたものにかわっており、これはロカルノ体制の現状を固定するものでしかなかった²⁹。そのため各国の支持をえることはできなかった。ヨーロッパ統合論は、第二次世界大戦後にまで持ちこされたのである。

第一次世界大戦を経験して、ヨーロッパの安全保障の確立の必要性を痛感し

たことが、クデンホーヴェのパンヨーロッパ運動を始めとするヴァイマル共和国期のヨーロッパ統合運動の背景にあった。このような安全保障の発想は、ドイツの組織平和運動の初期からの要求にも見られるもので、したがってヴァイマル共和国期の平和主義者のコンセンサスでもあった。そして同時にアメリカや日本といった新興国の勃興とソヴィエトロシアの「脅威」に対する西ヨーロッパの危機感も、ヴァイマル共和国期のヨーロッパ統合論に強く反映していたのである。

2. 平和主義者のヨーロッパ統合運動への反応

それでは平和主義者たちはこのクデンホーヴェのパンヨーロッパにどのような態度をとったのであろうか。

『ヴェルトビューネ』の記事からは、クデンホーヴェという人物に対する高い評価が読みとれる³⁰。本来、ヨーロッパの協調は平和主義者たちにとって重要な課題であった³¹。ズットナーとともにドイツ平和協会の設立に尽力したフリート Alfred Hermann Fried も積極的なヨーロッパ連合の支持者であったし³²、クヴィッデやオシエツキーらが所属していたドイツ人権協会も、まだ「新祖国同盟 Bund Neues Vaterland」という名称であった 1914 年から積極的に「ヨーロッパ合衆国」を目標として掲げ、活動していた³³。クデンホーヴェの運動とパンヨーロッパ連合に対する強い関心は、1926 年 10 月のパンヨーロッパ会議のすぐ後で『ターゲ・ブーフ』誌に書かれた次の記事からもうかがえる。

「パンヨーロッパ運動は初めて公式会議を招集したが、このウィーンで開かれた会議の出席者名簿に著名な名が見出されたことを満足感とともに指摘することができる。(中略)パンヨーロッパ運動が空々しい社交界の出来事であって、現実の世界には影響力がなく、将来的に重要性をもつことがないという懐疑的な人々の見解は、明らかに間違いである」³⁴。(引用文の括弧は引用者による。以下同様。)

しかしすぐ後に続けて、こう書かれている。

「しかしながら心配なのは、この運動でさえも、これまでと違うなんらかの方法を見つけることができなければ、結局のところ無に帰してしまうということである」³⁵。

平和運動の「方法」に関しては、当時平和主義者の中で様々な議論がなされていた。前述したように、ヴァイマル共和国期のドイツでは、第一次世界大戦の悲惨な経験を目の当たりにしたひとびとが戦争と平和の問題に関心をもち、それ以前よりも幅広い層が平和組織に加入した。平和主義者が暗殺、暴行を受け、言論の自由を侵害されるという現実がある一方で、恒久平和への望みは強かったのである。オシエツキーらが組織した反戦デモ「ニー・ヴィーダー・クリーク Nie-wieder-Krieg（戦争はもうごめんだ）運動」³⁶が多くの参加者を得たことは、その例である。

こうしたいわば平和運動にとって有利な状況を逃さないために、ヴァイマル共和国期には平和運動の大衆運動化が目ざされた。急進派が伝統的な国際法的平和運動とはちがって、ゼネストや兵役拒否を平和のための「方法」として強調したのはそこにあった。

戸澤英典氏はパンヨーロッパ運動の構想を見る場合、クデンホーヴェの社会秩序観、すなわち「新貴族主義」を見ることが不可欠であると述べている³⁷。クデンホーヴェによるパンヨーロッパ運動の貴族主義的特徴は、当時の平和主義者の求めた運動の方法とはまったく異なるものであったといえる。これを指摘したのがオシエツキーであった。オシエツキーは「クデンホーヴェの欠点。それは彼が、大衆が関わらないインテリの運動を作り出したことである」³⁸と述べ、燕尾服を着て有名な政治家に会い、署名を求めて運動をするクデンホーヴェのやり方は、帝国主義国家の権力者へ友好的なアピールをして、実際には慰懃な握手以外のものは何も得られなかった平和運動の初期の日々への逆戻りだと述べた³⁹。彼は次のように記している。

「理念としてのパンヨーロッパ。それはすっかり古臭くなってしまった平和主義に対して、進歩を意味している。方法としてのパンヨーロッパ。それは幻想的な時代への逆戻りである」⁴⁰。

クデンホーヴェのパンヨーロッパ連合は、パンヨーロッパ会議の様子からも理解できるように、いわば「貴族的なサロン」の運動の特徴をもっていた。平和運動が大衆に根付いたものでなければならぬとかねてから主張していたオシエツキーにとっては、この点は受け入れがたいものであった。第一次世界大戦以前のような大衆不在の平和運動を、「非政治的で幻想的なもの」⁴¹と厳しく批判していたオシエツキーにとっては、クデンホーヴェの運動は、まさに旧式の平和運動へ後退することを意味したのである。パンヨーロッパ運動に対する批判にも、オシエツキーの平和主義の特徴があらわれている⁴²。

オシエツキーはまた「クデンホーヴェ自身は、ヨーロッパをボルシェヴィズムから守ることが肝心だなどと講演や論文で繰り返し強調するなど、非政治的すぎる」⁴³と述べているが、『ヴェルトビューネ』誌の平和主義者がクデンホーヴェを批判したもうひとつの点は、彼のロシアへの態度にあった。クデンホーヴェのパンヨーロッパに見られるイギリス帝国の容認、ボルシェヴィズムの敵視、そして大資本家との提携は、左翼の平和主義者にとっては、到底受容できないものだったのである。ドイツ人権協会の会長であるレーマン・ルスビュルト Otto Lehmann-Russbüldt によれば、人権協会は第一次世界大戦以前からヨーロッパ統合に尽力してきたけれども、このドイツ人権協会のもとめるヨーロッパ共和国と、クデンホーヴェのパンヨーロッパとは別のものである。それは、ロシアとイギリスをヨーロッパから排除するクデンホーヴェのパンヨーロッパ運動は、新しい形の帝国主義だからであった⁴⁴。

クデンホーヴェと資本家との提携を危険視する態度は、『ヴェルトビューネ』誌でのアッカーマンの記事に明らかにみられる。アッカーマンは「ヨーロッパ合衆国 die Vereinigten Staaten von Europa」という言葉を用いて、

「ヨーロッパ合衆国は、大衆によってつくられ支えられるとすれば、世界合衆国への道となりうるだろう。世界合衆国は、たとえ今日の資本主義的構造のもとにあっても、プロレタリアのインターナショナルを援助し、世界革命を容易にするかもしれない」⁴⁵

としながらも、一方でパンヨーロッパに関しては、

「パンヨーロッパのために戦っている君たち。君たちに与している資本家階級に注意せよ。君たちはもうとうに前から敵を招きいれているのだ」⁴⁶

と述べた。さらに彼は

「資本家階級はパンヨーロッパ運動家の、人として尊敬に値する努力を妨害してしまうか、あるいは自分たちのために利用するだろう」⁴⁷

と書き、この結果、現状では「ヨーロッパ合衆国は世界平和の脅威であり、資本主義の利益のための軍備、戦争連合である」⁴⁸と結論づけた。

このアッカーマンがまさにその記事の題名とした「パンヨーロッパ - 危険なもの *PanEuropa - eine Gefahr!*」という主張に対して、パンヨーロッパの問題点を見て取りながらも、この運動に期待をかけるものもあつた。

「パンヨーロッパ（そのもの）が“危険”なのではなく、パンヨーロッパが危険な状態にあるのだ。そしてこの危険から、つまり敵の勢力に悪用されるという危険から、我々はこの新しいヨーロッパ運動をただ次のことによつてのみ守ることができる。それは我々が不平を述べて懐疑的な態度で傍観するのではなく、全力を一心にパンヨーロッパへ投入することである」⁴⁹。

ヨーロッパ統合と、それを基盤としての「世界合衆国」。それは国家間の闘争である戦争をなくすための道として、平和主義者にとって理想的なものであつた。このヨーロッパの合衆国化という理想と、それに由来するクデンホーヴェのパンヨーロッパ運動への期待、そしてパンヨーロッパ運動の現状との乖離にもっとも苦しんだのは、ヒラー *Kurt Hiller*⁵⁰ であつた。ヒラーはドイツ平和協会にも所属した平和主義者で、はじめは急進派に位置し、のちにシュテッカー *Helene Stöcker*、トゥホルスキーらとともに革命的社会主義者グループをつくって活動した人物である。彼は『ヴェルトビューネ』誌の代表的な論客で、当時の著名なジャーナリストであつた。ヒラーはクデンホーヴェのパンヨーロッパ連合に加盟し、1926年10月のパンヨーロッパ会議にルートヴィッヒ

Emil Ludwig やヴィネケン Gustav Wynecken らとともに参加して講演するなど⁵¹、積極的に活動している。

ヒラーの「パンヨーロッパのテーゼ Thesen zu Paneuropa」⁵²を見てみることにしよう。これは彼のパンヨーロッパ運動の理解を明らかにしている。

1. パンヨーロッパは目標ではない。目標は人間がこれ以上お互い殺しあうことのない世界である。パンヨーロッパはこの目標のための手段である。
2. パンヨーロッパは国際連盟と対立するものではない。 [...]
3. パンヨーロッパは社会主義と対立するものではない。 [...]
4. パンヨーロッパは革命的平和主義と対立するものではない。 [...]
5. 全体としてパンヨーロッパは、ジュネーブにある現在の国際連盟の体制と比べて、戦争の危険が少ないものである。国際連盟は拡大できなくなっただけでなく、間違いなく衰退へと向かっている。 [...]⁵³

このようなヒラーのパンヨーロッパ理解は、この社会主義、革命的平和主義の項により、クデンホーヴェ自身のものとはおよそ異なっていたといえる。これはヒラーがパンヨーロッパと、ヒラーの革命的平和主義の妥協点を求めようとした結果であった。ヒラーが革命的平和主義とパンヨーロッパを提携させようとしたのは、彼がクデンホーヴェという人物へ好感を抱いていたからだけではない。オシエツキーとは異なり、ヒラーがクデンホーヴェにみられた「新貴族主義」の態度に対しても共感を持っていたことがこの背景にあった。ヒラー自身、第一次世界大戦中から行動主義 *Aktivismus* に関わり、知的エリートによる政治の要求を行なっていた。ヒラーは貴族主義への期待と国家の枠を越えたヨーロッパ連合への期待をクデンホーヴェのパンヨーロッパ運動に託した。彼がパンヨーロッパそれ自体を「目標」ではなく、「手段」と述べたのは、そのためだったのである。

しかし 1926 年の時点では積極的にパンヨーロッパに参加したヒラーも、しだいに革命的平和主義とパンヨーロッパという全く異なるものを両立させることができなくなってくる。この結果、彼は 1929 年にはパンヨーロッパ連合から脱会している。この際ヒラーは『ヴェルトビューネ』誌上で「クデンホーヴェへの公開書簡 *Offener Brief an Coudenhove*」⁵⁴を書いた。ここで彼は、クデン

ホーヴェが以前はパンヨーロッパ運動の内政不干渉を主張していたにもかかわらず、ボルシェヴィズムの打倒や反革命を訴えたため、自分は残念ながらパンヨーロッパに幻滅してしまったと述べている⁵⁵。クデンホーヴェの反共の姿勢が増す一方で、ヒラーはその「革命的平和主義」を確固なものにし、ますます親ソの立場をとるようになっていた。このことはヒラーのクデンホーヴェ批判から明らかになる。ヒラーによれば、クデンホーヴェは革命によって世界をソヴィエト化しようとしている大国ソ連とボルシェヴィズムこそが「帝国主義的」と見なしているが、この見解は誤りであり、

「ボルシェヴィキはロシアのためにではなく、社会主義のために世界を獲得しようと願っているのです。帝国主義のない世界を求めようとする戦い、いかなる個人のそして国家の奴隷状態もない世界のための戦い、平和と生産性をともなった階級のない秩序のための戦い、こうした戦いを“帝国主義的”と呼ぶとは、なんとという詭弁でありましょうか」⁵⁶。

「世界のどの勢力のうちどこにも、ソヴィエトロシアほど世界平和思想の実現に役に立つところはない」⁵⁷

と述べた。

こうしたヒラーの「公開書簡」に対して、クデンホーヴェは同じく『ヴェルトビューネ』誌上で回答している⁵⁸。クデンホーヴェは、パンヨーロッパは指摘されるように確かに資本主義的民主主義と協力していると認め⁵⁹、革命による内戦は、諸国民間の戦争と同様に恐ろしいものであり、パンヨーロッパはこれを引き起こすような社会主義革命に与することができないと明確に述べて⁶⁰ ヒラーと見解を異にしたうえで、最後にヒラーに対してこう呼びかけている。

「今、貴方はパンヨーロッパに幻滅している。しかし、いつかソ連が国民社会主義的独裁に変わる日がきたなら、貴方は最も決定的でつらい幻滅を、共産主義によって経験することになるでしょう。もしかしたらそのとき、貴方は私を思い出すかもしれません。そしてパンヨーロッパを」⁶¹。

ところでこうしたクデンホーヴェのボルシェヴィズム理解と同様に、オシエツキーも革命のための内戦を戦争と同義に位置づけていた⁶²。しかしオシエツキーは、パンヨーロッパ運動に関しては批判の手をゆるめることはなかった。オシエツキーも、クデンホーヴェの植民地容認の態度からパンヨーロッパ運動を帝国主義的だと位置づけている。彼は以下のように述べている。

「ヨーロッパ統合は帝国主義を支持するひとびとにとって、外の世界におけるヨーロッパの主導権の維持を意味しているだけでないのか。(こう考えると)なぜこんなにも多くの、明らかに非平和主義的な政治家が、パンヨーロッパ構想に共感するのかすぐに理解できる」⁶³。

民族自決の要求は、ヴァイマル共和国期のドイツの平和主義者にとっては自明のこととなっており、『ヴェルトビューネ』誌上でも中国の問題や植民地解放について議論がなされていた。とくに『ヴェルトビューネ』の中国問題の専門家であったのがコールバッハ Otto Corbach である。彼もオシエツキーと同様に、植民地保有を容認するパンヨーロッパを帝国主義的と位置づけ、この帝国主義的パンヨーロッパがアジアの独立を叫び、アジアのために協力するなどと言っても説得力がないとしている⁶⁴。

このような「帝国主義」に対する見解や、上述したような貴族的パンヨーロッパ運動に対するオシエツキーの批判から指摘できるのは、ヴァイマル共和国期の平和運動史の脈絡では、運動の主な担い手であった大衆運動を目指した左翼知識人にとっては、パンヨーロッパ運動は前時代的な存在であったということである。例えばオシエツキーに関して言えば、彼は左翼を自認しながらも、社会民主党にも共産党にも所属することはなく、むしろ党のあり方を常に批判し、さらにボルシェヴィズムの問題点を指摘しつづけた知識人のひとりであったが、この彼の目にはヨーロッパの経済的な利益を重視したクデンホーヴェのプログラムは「帝国主義的」にうつたのであった。クデンホーヴェがしだいにその反共的態度を強め、パンヨーロッパがソ連に対する西欧の軍事同盟化したことも、全面的軍縮と非暴力を訴える急進派の平和主義者には与することができなかつた理由のひとつであった。

ドイツの組織平和主義者とクデンホーヴェのヨーロッパ統合運動の間には明

らかに距離が見られた。ドイツの平和主義者は原則として世界を束ねる組織に関心をむけていたため、ヨーロッパ構想、つまり地域的に限定された組織がつくられることによって国際連盟が弱体化することを懸念していたのはその理由のひとつであるが、これは『ヴェルトビューネ』の記事にはほとんどあらわれてこない。『ヴェルトビューネ』誌上の議論から読み取れるのは、大衆運動としての平和運動からほど遠いパンヨーロッパに対する批判と、クデンホーヴェのイギリス、ロシアへの態度からくる「パンヨーロッパ＝帝国主義」という急進派的理解であった。

おわりに

本稿はヴァイマル共和国期ドイツの平和主義者の平和観に対する関心から、当時影響力のあったヨーロッパ統合運動「パンヨーロッパ運動」を概観し、左翼平和主義者の言論活動の舞台であった雑誌『ヴェルトビューネ』に掲載された同運動に関する記事を取りあげ、平和主義者の見解を当時の平和主義の傾向から考察したものである。

1920年代にあらわれたヨーロッパ統合運動は、平和へのひとつの方法として、そして「ヨーロッパの危機」に対抗するための方法として模索された。国際連盟の弱さが露呈するにつれ、クデンホーヴェによって提唱されたパンヨーロッパ運動は、この組織にかわる理想的なものとして理解され、支持をえた。ロカルノ条約や不戦条約、そしてブリアンの国際連盟へのヨーロッパ合衆国に関する提案によって、実現が近づいたかのように思われた。しかし実際に政府レベルで議論されるにつれ、しだいにヨーロッパ統合の構想は国家主義的な目的に奉仕させられた⁶⁵。

クデンホーヴェもヒラー、オシエツキーら平和主義者も、ともにヨーロッパ協調の必要性を強く認識していた。オシエツキーら平和主義者はクデンホーヴェのヨーロッパ統合の理念そのものには共感しながらも、彼の運動は帝国主義的と批判し、当時のヨーロッパの現状からは実現が不可能であると考えていたのである。

ここから明らかになるのは、ヨーロッパをめぐる議論にも当時の平和運動の問題点が反映していたということである。ソ連の扱いをめぐる問題は、第一次

世界大戦以前からの穏健派の平和主義とヴァイマル共和国期に登場した急進派の平和主義の立場の違いを明らかにしている。オシエツキーのクデンホーヴェへの批判は、そのまま旧式の平和主義への批判と受けとれる。ヴァイマル共和国期は平和運動が運動の主体としての大衆を意識せざるをえなくなった時期であり、その獲得方法が模索された。この点で穏健派と急進派は方法論を異にし、論争し、分裂して、これは結局のところたださえ少数派であった平和運動の弱体化、そしてヒトラー政権の前での無力化につながったのであった。

本稿では紙幅の関係上、ドイツ平和主義者のクデンホーヴェのパンヨーロッパ運動に対する反応にとどまったが、当時の思想を知るためには、クデンホーヴェ側の平和主義者に対する見解を検討していくことも必要となるだろう。また本稿では『ヴェルトビューネ』上のパンヨーロッパに言及した記事に国際連盟の問題があらわれなかったが、同時代の平和主義者のなかには、パンヨーロッパの問題を国際連盟問題から取りあげるものもある⁶⁶。国際連盟に対する平和主義者の態度からヨーロッパ統合と平和主義者の見解をみていくことも今後の課題となるであろう。

ゾントハイマーが「左翼インテリ層の精神は、『日記』誌や『世界舞台』誌の中に読みとれるように、ひとつの共和主義精神であったが、この精神は現存の共和国の中では、新ナショナリズムの精神と同様、正当なものとは認められなかった⁶⁷」と述べたように、オシエツキーらの見解は当時の社会で受け入れられなかった。そして当時のドイツでは、不戦条約の調印後も戦争拒否 *Kriegsächtung* の観念が通用しておらず、多くの場合は戦争を政治の正当な手段として認識しており、さらには戦争を崇拝する傾向が根強くあった。こうしたドイツの状況を考慮すれば、しかしながら、クデンホーヴェおよびオシエツキーら平和主義者双方の努力は評価ができるだろう。彼らが議論したヨーロッパ統合運動は EU 統合によってようやく芽を出しはじめたのである。

[付記] 本稿は 2003 年 6 月 21 日に行なわれた 2003 年度専修大学歴史学会大会における報告「ヴァイマル共和国期ドイツ平和主義者のヨーロッパ観 — カール・フォン・オシエツキーを例として」をもとに、加筆修正したものである。報告の際にコメンテーターを務めてくださった渡辺知氏には非常に有益なご助言をいただいた。この場を借りてお礼を申しあげる。

- 1 19世紀後半からヴァイマル共和国末期までのドイツにおける組織平和運動の概観は、Karl Holl, *Pazifismus in Deutschland* (Frankfurt a.M. 1988); 武田昌之「ヴァイマル期における平和主義」『歴史学研究』第550号、1986年1月)など。
- 2 *Die Weltbühne. Wochenschrift für Politik, Kunst, Wirtschaft*. Hg.v. Siegfried Jacobsohn, später Carl von Ossietzky und Kurt Tucholsky (Berlin 1918-1933), Vollständiger Nachdruck (Königstein(Ts) 1978). 本稿ではこのリプリント版を使用した。
- 3 カール・フォン・オシエツキー (1889-1938) はハンブルク生まれのジャーナリストで平和主義者。「ペルリーナー・フォルクスツァイトゥング *Berliner Volkszeitung* (ベルリン民衆新聞)」紙の編集者を務めた後、1924年から『ターゲ・ブーフ』誌の編集者。1926年に『ヴェルトビューネ』誌にうつり、同年死去した創刊者のヤーコプゾーンのあと編集長を務めたトゥホルスキーから、この職をひきついだ。同誌に掲載された国防軍の秘密再軍備をあばく記事をめぐって、責任者として秘密裏におこなわれた裁判のもと国家反逆罪で禁固18ヶ月の判決をうけた。恩赦によって自由の身になるものの、ヒトラーの政権下で逮捕され、エスターヴェーゲン強制収容所に収容された。なお、註1のヴァイマル共和国期の平和運動の概観を含め、オシエツキーについて詳しくは拙稿「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」(『歴史学研究』第786号、2004年3月)を参照。
- 4 Ursula Madrasch-Groschopp, *Die Weltbühne. Porträt einer Zeitschrift* (Frankfurt a.M. / Berlin / Wien 1985), S.160.
- 5 『ターゲ・ブーフ』誌は演劇評論家のグロスマン Stefan Grossmann によって1920年に創刊された。『ヴェルトビューネ』と同様、『ターゲ・ブーフ』も左翼あるいは自由主義左派の知識人が政治、経済、文化をはばひろく論じた雑誌であった。両者はその内容や体裁、発行部数(最高でおよそ15,000部)も同じくらいで、お互いライバル雑誌として意識した。執筆者でさえもわけあっていて、例えば日本でもよく知られるエーリヒ・ケストナー Erich Kästner や、クラウス・マン Klaus Mann など多くの作家、ジャーナリストが両方の雑誌に寄稿していた。またベルトルト・ブレヒト Bertold Brecht やヴァルター・ベンヤミン Walter Benjamin などの作家の記事も読むことができる。
- 6 Alf Enseling, *Die Weltbühne. Organ der intellektuellen Linken* (Münster 1962); Istvan Deak, *Weimar Germany's Left-Wing Intellectuals. A political history of the Weltbühne and its circle* (Berkeley / Los Angeles 1968)など。
- 7 Gunther Nickel, *Die Schaubühne - Die Weltbühne. Siegfried Jacobsohns Wochenschrift und ihr ästhetisches Programm* (Opladen 1996)など。
- 8 Dieter Lang, *Staat, Recht und Justiz im Kommentar der Zeitschrift Die Weltbühne*. (Frankfurt a.M. 1996); Claudia Schöningh, *„Kontrolliert die Justiz«. Die Vertrauenskrise der Weimarer Justiz im Spiegel der Gerichtsreportagen von Weltbühne, Tagebuch und Vossischer Zeitung* (München 2000).
- 9 村瀬興雄「欧州統合の前史—ドイツを中心として—」(日本国際政治学会『欧州統合の研究』、有斐閣、1964年、1-15頁)。
- 10 木谷勤「欧州統合の理念と現実」(『思想』489号、1965年3月、339頁)。
- 11 日本において Coudenhove-Kalergi は「クーデンホーフ・カレルギー」と記されることが多いが、本稿ではより原語の音に近い「クデンホーヴェ・カレルギ」と記すことにする。これについては相馬保夫「クデンホーヴェ・カレルギ」(西川正雄他編『角川世界史辞典』角川書店、2001年、268頁)を参照。なおクデンホーヴェについては、Reinhold Wagnleitner, „Richard N. Graf von Coudenhove-Kalergi“. In: Helmut Donat / Karl Holl (Hg.), *Die Friedensbewegung. Organisierter Pazifismus in Deutschland, Österreich und in*

- der Schweiz. *Hermes Handlexikon* (Düsseldorf 1983), S.68f; Rolf Italiaander, *Richard N. Coudenhove-Kalergi. Begründer der Paneuropa-Bewegung* (Freudenstadt 1969); Karl Holl, Graf Coudenhove-Kalergi und „Paneuropa“. In: Heinz Duchhardt (Hg.), *Europäer des 20. Jahrhunderts. Wegbereiter und Gründer des »modernen« Europa* (Mainz 2002), S.11-37; 日本語では金丸輝男「序章 欧州統合への道を切り開く — 「パン・ヨーロッパ」の設立と欧州統合運動— クーデンホーフ・カレルギーの思想と行動」(金丸輝男編『ヨーロッパ統合の政治史 人物を通して見たあゆみ』、有斐閣、1996年); 戸澤英典「パン・ヨーロッパ運動の憲法体制構想」(『阪大法学』第53巻第3・4号、2003年11月)など。
- ¹² 例えば R. N. Graf Coudenhove-Kalergi, *Der neue Herrscher*. In: *Das Tage-Buch*, 10.3.1928, S.392f など。
- ¹³ Richard N. Graf von Coudenhove-Kalergi, *Paneuropa* (Wien / Leipzig 1923). (リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー、鹿島守之助訳編、「パン・ヨーロッパ」『クーデンホーフ・カレルギー全集 1 クーデンホーフ=人・思想・行動』、鹿島研究所出版会、1970年)。
- ¹⁴ 同書 63 頁および 68 頁。
- ¹⁵ Holl, Graf Coudenhove-Kalergi und „Paneuropa“, S.20f.
- ¹⁶ 前掲、クーデンホーフ・カレルギー『パン・ヨーロッパ』54-55 頁。
- ¹⁷ 同書 81 頁。
- ¹⁸ 同書 88 頁。
- ¹⁹ Derek Heater, *The Idea of European Unity* (London 1992), P.128 (デレック・ヒーター『統一ヨーロッパへの道 シャルルマーニュから EC 統合へ』田中俊郎監訳、岩波書店、1994年、192 頁)。
- ²⁰ Joachim Weinert, *Paneuropa-Bewegung 1922-1933*. In: *Die bürgerlichen Parteien in Deutschland 1830-1945*. Hg. von Dieter Fricke u.a., Bd. 2 (Berlin 1970), S.466.
- ²¹ Heater, *The Idea of European Unity*, P.128 (前掲、ヒーター『統一ヨーロッパへの道』193 頁)。
- ²² Weinert, *Paneuropa-Begegnung*, S.467.
- ²³ Holl, Graf Coudenhove-Kalergi und “Paneuropa”, S.25.
- ²⁴ Thomas Mann, *Die Bäume im Garten. Rede für Pan-Europa*. In: ders., *Von Deutscher Republik. Politische Schriften und Reden in Deutschland*, Gesammelte Werke in Einzelbänden. Hg. von Peter de Mendelssohn (Frankfurt a.M. 1984), S.285-293.
- ²⁵ Weinert, *Paneuropa-Bewegung*, S.467f.
- ²⁶ ハイレについては、Karl Holl, *Europapolitik im Vorfeld der deutschen Regierungspolitik. Zur Tätigkeit proeuropäischer Organisationen in der Weimarer Republik*. In: *Historische Zeitschrift*, Band 219, 1974, S.33-94 を参照のこと。
- ²⁷ Reinhold Lütgemeiner-Davin, *Pazifismus zwischen Kooperation und Konfrontation. Das Deutsche Friedenskartell in der Weimarer Republik* (Köln 1982), S.76-80.
- ²⁸ Ebenda, S.79.
- ²⁹ 前掲、木谷「欧州統合の理念と現実」346 頁。
- ³⁰ 例えばエレーサー Arthur Eloesser はクーデンホーフヴェについて「嫌悪するより理解しようとし、怒鳴ることなく考慮し、道徳的な勇気を示してそれに加えて行儀の良さも示す、もしこの(クーデンホーフヴェの)ような人物がもつとしたなら、ドイツの空気ももつと気持ちよくなるだろうに」と述べている。Arthur Eloesser, *Der Pan-Europäer*. In: *Die Weltbühne*, 12.6.1924, S.798.

- ³¹ Dieter Riesenberger, *Geschichte der Friedensbewegung in Deutschland. Von den Anfängen bis 1933* (Göttingen 1985), S.213.
- ³² Carl H. Pegg, *Evolution of the European Idea 1914-1932* (Chapel Hill / London 1983), P.10.
- ³³ Otto Lehmann-Russbüldt, *Der Kampf der Deutschen Liga für Menschenrechte vormals Bund Neues Vaterland für den Weltfrieden 1914-1927* (Berlin 1927), S.114.
- ³⁴ Tagebuch der Zeit. In: *Das Tage-Buch*, 9.10.1926, S.1499.
- ³⁵ Ebenda, S.1499f.
- ³⁶ 「ニー・ヴィーダー・クリーク運動」については、前掲、拙稿「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」26-27頁を参照。
- ³⁷ 前掲、戸澤「パン・ヨーロッパ運動の憲法体制構想」362頁。
- ³⁸ C.v.O. (= Carl von Ossietzky), Zum 11. August. In: *Die Weltbühne*, 10.8.1926, S.202. (オシエツキーの記事は同時に彼の全集 Carl von Ossietzky, *Sämtliche Schriften*. Hg. v. Gerhard Kraiker / Gunther Nickel / Renke Siems / Elke Suhr, 8 Bde., (Reinbeck bei Hamburg 1994)も参照した。以下タイトルは OSS (=Ossietzkys Sämtliche Schriften)と略し、同書の頁も記載する。この引用は C.v.O., OSS, Bd.3 [65f], S.339f.)
- ³⁹ Ebenda.
- ⁴⁰ Ebenda.
- ⁴¹ C.v.O., Die Pazifisten. In: *Das Tage-Buch*, 4.10.1924, S.1402 (C.v.O., OSS, Bd.2 [474], S.374).
- ⁴² 拙稿「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」。
- ⁴³ C.v.O., Coudenhove und Briand. In: *Die Weltbühne*, 27.5.1930, S.784 (C.v.O., OSS, Bd.5 [927], S.362).
- ⁴⁴ Ebenda.
- ⁴⁵ W. Ackermann, Paneuropa – eine Gefahr! In: *Die Weltbühne*, 28.9.1926, S.499.
- ⁴⁶ Ebenda.
- ⁴⁷ Ebenda, S.500.
- ⁴⁸ Ebenda, S.502.
- ⁴⁹ Siegfried v. Vegesack, Paneuropäischer Kongreß (Bemerkungen). In: *Die Weltbühne*, 19.10.1926, S.631.
- ⁵⁰ ヒラーについては、前掲、武田論文「ヴァイマル期における平和主義」26-28頁、および Karl Holl, Kurt Hiller. In: Donat / Holl, *Die Friedensbewegung*, S.186-188; Rolf von Bockel, *Kurt Hiller und die Gruppe Revolutionärer Pazifisten (1926-1933). Ein Beitrag zur Geschichte der Friedensbewegung und der Szene linker Intellektueller in der Weimarer Republik* (Hamburg 1990)を参照。
- ⁵¹ Vegesack, Paneuropäischer Kongreß, S.630f. ここでヴェゲザックはパウル・レーベやヨゼフ・ヴィルトとならんで「エミール・ルートヴィヒ、クルト・ヒラーそしてグスタフ・ヴィネケンがドイツの代表として発言を許されたことは、この会議をようやく、多くの年老いた偉いさんたちによって麻痺させられていたような状態だった重苦しい空気が解放した」と述べている。
- ⁵² Kurt Hiller, Thesen zu Paneuropa. In: *Die Weltbühne*, 18.1.1927, S.112.
- ⁵³ Ebenda.
- ⁵⁴ Kurt Hiller, Offener Brief an Coudenhove. In: *Die Weltbühne*, 16.7.1929, S.86-90.
- ⁵⁵ Ebenda.
- ⁵⁶ Ebenda, S.88f.

-
- ⁵⁷ Ebenda, S.90.
- ⁵⁸ R. N. Coudenhove-Kalergi, Offene Antwort an Kurt Hiller. In: *Die Weltbühne*, 13.8.1929, S.229-233.
- ⁵⁹ Ebenda, S.229.
- ⁶⁰ Ebenda, S.231.
- ⁶¹ Ebenda, S.232f.
- ⁶² C.v.O., Nicht müde werden! In: Nie wieder Krieg, April 1921 (C.v.O., OSS, Bd.1 [155], S.386).
- ⁶³ C.v.O., Rif und Riffe. In: *Die Weltbühne*, 1.6.1926, S.834 (C.v.O., OSS, Bd.3 [642], S.278f).
- ⁶⁴ Otto Corbach, Europa und die Angelsachsen. In: *Die Weltbühne*, 27.12.1927, S.956f.
- ⁶⁵ 前掲、木谷「欧州統合の理念と現実」347頁。
- ⁶⁶ 例えば「もうひとつのドイツ Das Andere Deutschland」紙にみられるシュトレーベル Heinrich Ströbel のパンヨーロッパ批判がここに数えられる。Heinrich Ströbel, Paneuropa? In: Das Andere Deutschland, 17.5.1930. 同じく Heinrich Ströbel, Wie organisieren wir den Frieden? In: Das Andere Deutschland, 8.10.1932 など。
- ⁶⁷ Kurt Sontheimer, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933* (München 1962, 4.Auflage, Nördlingen 1994), S.309 (クルト・ゾントハイマー『ワイマール共和国の政治思想』、ミネルヴァ書房、1976年、329頁)。